

特106

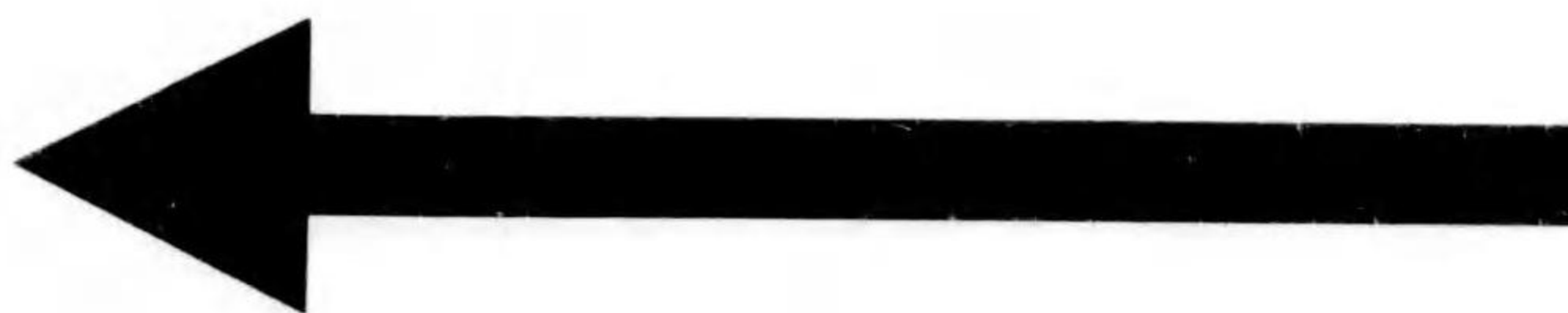
141

り誇の樽小

げやみ樽小名一



始





小福の誇

七五二一布五

大正
11. 1. 23
内交

序

往時冷煙海を鑽し、款乃淋しかりし漁村が、五十年後の今日に於て、人口十二万を擁し、一躍して世界的商港たらんとする程の、發展殷賑を極めて、區民に福祉幸慶を與へたのは、全く天恵の良港を有するからである、然り港灣は小樽の生命であり、且それが何よりも大なる誇りである、蓋し君が本書を編述した所以のものは、小樽に於て誇りとすべき各方面の特勢を社會に紹介し、且小樽の現存する誇りを活用して以て今後の發達進暢に努めんとする愛區的意志に外ならない、一言以て序に代ふ

大正十年十二月

小樽商業會議所會頭

森

正

則

從來刊行されし諸種の小樽紹介と全く行方を異へたのは此「小樽の誇り」一篇である同じ紹介するにも單に小樽の實勢を他に詳知せしむるがため編述されしものもあり若くは多數の參考資料に旅客の便覽に供するものもあるが此以外に型を破つて小樽の各方面に現存する總ての誇りを實益と趣味を併有さすべく最も忠實に描出しやうと精々努めた心算であるで若し本書を繕いて美しく彩られた「小樽の縮圖」と或る意味に於て觀らるる人かあらば編者望外の幸福であり且本書刊行の目的を達成し得らるゝものとして愛讀者と共に満足を分ちたいのである「小樽の誇り」全篇に漲る氣魄は勿論共編者たる親友大槻翠雨君ご微力ながらも此一事業を完成する上に洵大の替援を惜まれざりし小樽各方面の誇るべき人々や常に精巧なる技術家として斯界に立てる寫真師村中修吾君の寫真銅版製作の努力を共に鳴謝して止まぬ次第である

大正十年師走

編者識す

顧みれば「忘れずの趾」一篇を出版し操觚界を去らうとした私は十年振りで北海道に周遊した友人である前北海日々新聞社長廣田東民氏から別れ舊知吉田舞城氏は北海道報小樽支局の人となつたのは大正六年の春である、その年道報は廢刊し私は學友櫻井七郎兵衛氏の斡旋盡力で北門日報營業部に入つて今日に及んだので奇しきは我が運命である、早稻田實業學校を出でから南清、北海道、故山に十年間を無爲の裡に暮らし、再び北海道へ來て數年経たが未だに何事も成し得ぬ私は放縱な生活をした時とは違ひ今では二人の父となつて了つた、この數年間何ら得る處なき私は記念として「小樽の誇り」を出版する事を企てた、これがため犠牲者となる編者小野玄人君の盡力と、寫真技師村中修吾氏が仁俠的應援とにより本書を刊行することか出來たのを私は永久に感謝する次第である

綠町の寓居にて。

大正十年十二月

大 槻 翠 雨

目 次

小樽の今昔.....	一
名所舊蹟.....	四
操觚界.....	八
醫界.....	一〇
實業界.....	一二
技巧界.....	一八
名物.....	三二

旅	館	三三
交通	界	三六
藝術	界	三八
興業	界	六五
花柳	界	七〇

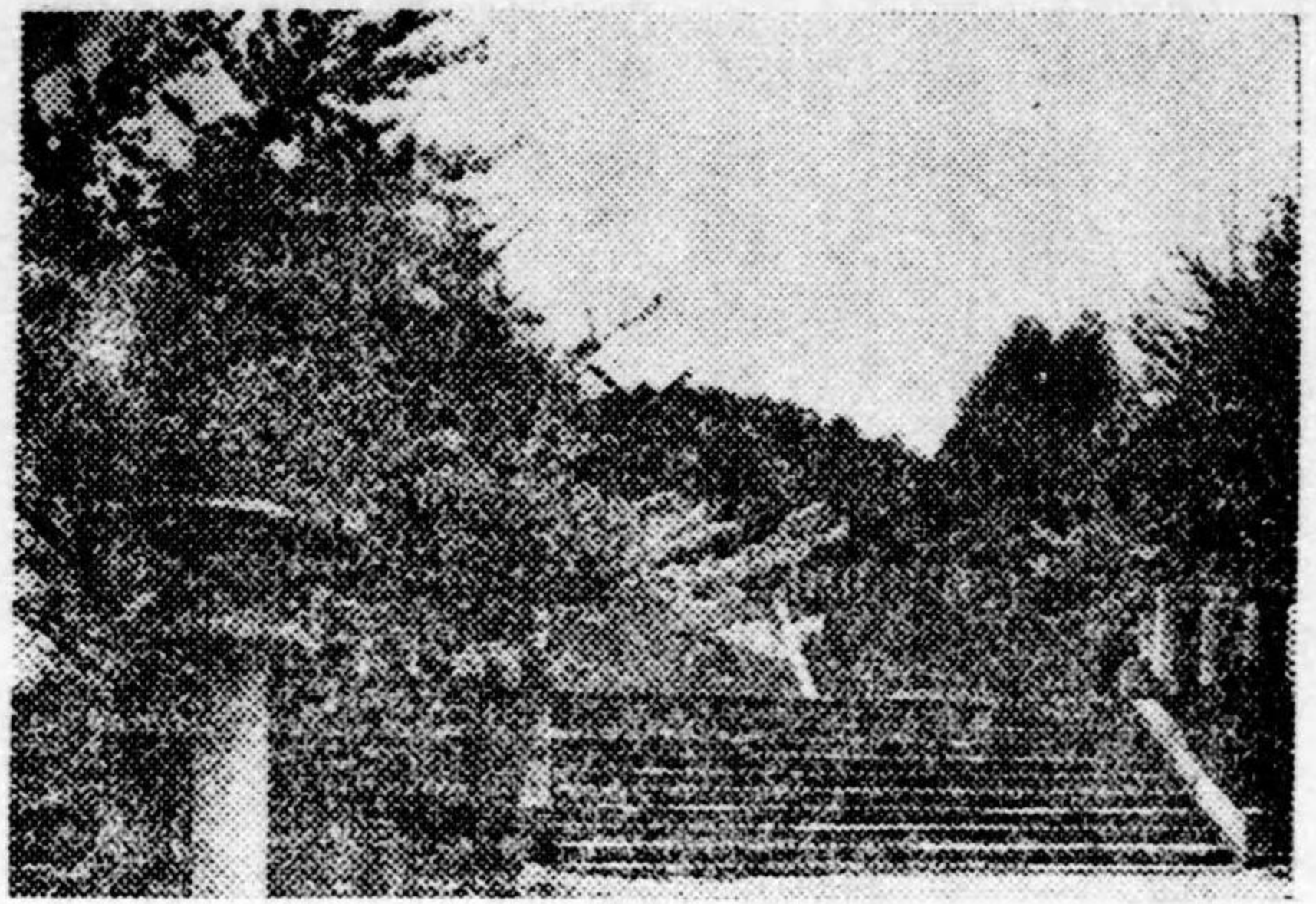
小樽の誇り

小樽の今昔

小樽港は其昔松前藩の北蝦夷一帯の地を領有して居た時代、石狩小樽の二郡を境界として貫流する『オタルナイ』川沿岸の土人を現今の小樽に移し漁場を開いて之を『オタルナイ』場所と呼んだのに原づく『オタルナイ』は舊土人の語で砂川又は小石の川を意味す、後文化三年露人薩哈噠島に來冠するに及び徳川幕府は之を直轄し文政四年再び松前藩の管領に復したが文化四年近藤重藏守重の巡視し其守備の必要を幕府に建議したので安政二年再び幕府の直轄に歸してから漸次拓地殖民策を講じ今の勝納川沿岸に始めて部落の状態を形成したのには即ち現時人口十一万を抱有する般賑の市街を現出した小樽港發展の創始である、後

慶應の初年には村並となり明治二年小樽郡に編入された當時の戸數四百六十八戸、人口二千三百人で町名を附したのは明治三年山ノ上、信香、信香裡、勝納、若竹、金曇、芝居、新地の各町を設置し色内、手宮の二村は高嶋郡に新設され明治四年から七年までに開運、有幌、量徳、永井、入船、港、汐見臺、龍徳、若松、新富、眞榮、高砂、河原の各町を新設し明治八年は港町海岸の埋立を行ふて堺町を置き初めて陸路高島郡と往來の道を開いた明治十四年に色内村を色内町、手宮村を手宮町に改稱し同時に稻穂、相生町成り明治十六年曙、住ノ江明治十九年山田吉兵工氏私費を以て山田町を設け二十三年砂崎、南北濱町を設け小樽區現在の基礎が全く成つたのである三十二年十月區制執行と共に獨立で三十八ヶ町村を保有し三十三年入船町奥に遊廓を移し現今の發達膨脹を來したのだ明治の初年から十四年鐵道開通の頃までは今の勝納川附近金曇から開運町に及ぶ一帶の地は小樽繁華の中心點で其當時金曇町に遊廓があり盛況を極めたものだが次第に繁榮を色内町方面に移された小樽港が僅々三十余年の間に日本海岸の一漁村から一躍して帝國屈指の商港となり又最

近の發展振りは實に目醒ましく本道拓殖事業の進歩に伴れて海陸物産の吞吐港となつたのは港灣其物の位置、陸岸の緩環水深、底質の佳良、揚陸の便利等に依つて日本海上の商權を掌握し明大正十一年四月市制執行さるれば更に將來大都市として諸般の施設經營を策し世界的商港たるべき可能性を有つて居るから小樽人士は大に之を誇りとせねばならぬ



名所古蹟

住吉神社（住ノ江町）小樽の太柱である同神社の創立紀年は詳かでないが古老の言によれば天知年間又は元祿年間の創立だといふ元治元年六月十四日當時徳川家の旗本宇津木頼母か漁場時代の小樽奉行を勤めて居た際始めて『黒江神社』の神輿渡御式を行ひ明治三年函館八幡宮神主菊地重賢開拓使を経て上京し神體神祇官点検の上勸請し神社々格改正の際未定に付明治八年郷社となり同二十五年一月九日『黒江神社』を住吉神社と改稱出願の許可を得三十九年十一月二十六日縣社に昇格

したのである『黒江神社』とならない以前は山ノ上字三本木今の開陽亭跡に嚴島神社を祀つて辨天社よりも航海神を祀らねばならぬと宇津木奉行が進んで主張した結果嚴島神社の代りに今の住吉神社を小樽の氏神としたのである同社の境内は八千二百二十三坪二合で毎年七月十四日宵宮祭、同十五日日本祭、十六日納祭を盛大且崇嚴裏に行ひ全區をして歡樂の巷たらしめるのだ祭神は素盞男命の兄君に渡らせ給ふ底筒男神、中筒男神、表筒男神の御三方之に配祀した神々は大物主神、保神、八重言代神で主神は航海守護神であらせらるゝ社司は星野三郎氏

古代文字（手宮）小樽驛から二十一町三十間手宮公園の盡くる所海岸斷崖の岩窟中にあ
る小樽唯一の古碑で高さ一間半、幅員約間半の石壁に彫刻された四十有餘の『石文』の實體
の闡明について從來所説區々であつたが大正七年に入り廣島高等師範學校教授中目文學士
が種々苦心史的研究に因り文は肅慎人の手に成つた基誌で鞅鞅語を古代土耳其古文字で記
たもので現存の文跡は『我は部下を率い大海を渡り……闘ひ……此洞穴に入れり』といふ

意譯をして我考古學界に史眼炬火の如き學者だと思はしめた此碑は齋明天皇六年神武紀元千三百二十年代(今大正十年を距る千二百六十一年前)のものだと考古學上斷定されて居る内務省では小樽の古碑を名勝史蹟として永久保存するよう小樽區に扱はして居る

花園公園 明治三十三年の開設で廣表約十萬坪、園内には日露戰捷記念碑、皇太子殿下御慶事記念碑、皇太子殿下(今上陛下)御手植の松等あり市街の般賑、港内の風光を一眸の裏に收むるを得る景勝地でグラウンドは優に數萬人を容るゝに足る好箇の運動場である

手宮公園 手宮停車場の後方で野趣掬すべきも尙未だ公園としての體をなさぬけれ共、園上に起つて展望すれば港内の賑ひ遠近の風光宛がら指呼の裏に在る思ひがする

五百羅漢(潮見臺町) 南小樽驛から西南に位して約十五町、文政八年松前章廣公が勸請した閑寂幽邃の青葉の山腹に在る名刹で羅漢堂の『靈光無邊』と鏤刻せる金文字の大扁額を仰いで堂内に入れば兩側の棧敷に『郭然無聖』と喝破して居る五百の羅漢がズラリ居並ぶので參詣者をして神格氣分を潑瀾たらしむることが出来る本道屈指の仙寰だ

公會堂 今上陛下尙東宮に在しませる明治四十四年八月本道行啓の時、富豪藤山要吉氏が工費二萬六千圓を投じて公園内に建設し之を區に寄附したもので各種公私會合場に充てられて居る

八景と十二勝

故三條實美公明治十三年小樽八景を選びて住、**吉秋月**、**祝津夜雨**、**色内晴嵐**、**濱中夕照**、**朝里落雁**、**石狩飯帆**、**龍德晚鐘**、**增毛暮雪**と賞した又他に十二勝を選んだ人あり曰く**赤巖游鷗**、**高島漁聚**、**花園嬉春**、**波堤峭帆**、**宮阜涼月**、**勝納聚雨**、**龍德清梵**、**月凌吟虫**、**羅溪霜葉**、**天宮奇跡**、**神威驚濤**、**狗嶽晴雪**を得て小樽の風光を賞して居る

操 觚 界

小樽區の新聞事業は興亡常なく今迄幾多の變遷を見たのだが明治二十四年富豪金子元三郎氏同年四月二十一日を以て東都より知名の文士を招き北門新報を發刊した之が小樽に於ける新聞である同新報は二十六年五月札幌に移轉し後幾干もなくして斃れ次いで新北門社創立されて間もなく廢刊爾來今日まで多數の新聞發行されたけれ共、悉く經營難に堪へずして何れも廢刊

小樽新聞（港町） 明治二十七年故社長上田重良氏に依りて創刊其後社業益々隆盛に赴き現在港町に石造三層樓の大建物は本社で輪轉機三臺を有し北海タイムスと共に本道操觚界の双壁で主筆は重役の平野文安氏編輯局長は加納虎太郎氏社中機敏達筆の記者が多い

北門日報（稻穂町） 四頁の夕刊新聞で前代議士寺田省歸氏が献身的に後援し居るのと理事

松本隆氏が着實温健な經營振りを發揮するので社業漸く擴張の域に達し此冬三層樓鐵網混粘土の社屋を新築し輪轉機一臺を使用す創刊は大正六年八月で専務山内信彌、主筆岡田耕平編輯長貴志忠憲諸氏

小樽毎夕新聞（東雲町） 明治四十一年九月創刊社長河田邦太郎氏

北海タイムス支局（入舟町） 北海全道に覇を稱する大新聞で輪轉機三臺を有し發行部數は本道一、道廳公布式の掲載新聞で理事東武、河部宇之八、主筆兼編輯長山口喜一氏支社長は本道操觚界の耆宿田中道孝氏

醫 界

小樽病院 (量徳町) 小樽の素封家本間賢次郎、青木乙松、早川兩三の三氏及故宮腰定作氏の出資に依りて大正元年十月屹然として聳ゆる宏莊な建物が出來た地方病院としての設備は完全且最新の治療法で入院外來患者は毎日殺到し盛況を呈して居る院長瀬戸國治氏は醫學博士本道の圭界オーソリチーと目されて居り事務長の出崎寅次郎氏堅實非凡なる事業的手腕を揮ふて發展に努めて居ると院長以下醫員は

外	科	醫學博士	瀬戸國治
	醫學士	井上不二雄	
	醫學士	山口富吉	

內科	醫學士 (留學中)	堺善三郎
專醫學士	中野次郎	
女專醫學士	宮林慶介	
產婦人科	醫學博士	瀬戸國治
專一醫學士	星野國勝	
耳鼻咽喉科	醫學士	勝田習之
眼科	醫學士	伊藤音醬
藥劑師	藥劑師	原田要作
	藥劑師	齋藤秀吉

岡本病院 第一火防線通りの同院は院長醫學士岡本辰之助氏の經營で産科婦人科専門の醫術に長け患者が毎日院内に密集する程の繁榮を極めて居る

北海道銀行（色内町）本道金融界を縦断する一大勢力を認めらるゝ道銀は屯田銀行の後身たる北海商業銀行及余市銀行の後身たる小樽銀行の合併したもので大正元年現在の大建物を新築し八年七月二百万圓の増資を執行し今の専務取締役長谷川直義氏は中興の功勞者たる横山昌次郎氏に代りて大に敏腕を揮ひ拂込濟資本金百三十六万八千三百余圓積立金五十万圓營業の成績頗る好況を持續し社礎百年の長計を確立し今や本道唯一の民間大銀行といはれ支金庫及北海道本金庫の事務札幌兩區の區費地方稅國務事務、日本勸業銀行の代理事務を扱つて信用無比の評あり支配人の山口治作氏また常に堅實なる營業振りを揮はし斯界に重きをなして居る全道に支店十七ヶ所、派出所十一ヶ所を有し重役は何れも本道實業界中の錚々たる人物揃ひ

拓殖貯金銀行小樽支店 拓殖貯金銀行は本店を札幌に支店は區内第一火防線に店舗を有し手宮、色内、花園、若松の各町に出張所を設け一般貯蓄の取扱をなし營業益々隆盛に赴く支店長は温厚なる黒田清治氏で明年一月から北門銀行と改稱

不動貯金銀行小樽支店 第一火防線通りに店舗を有し長南孝平氏支店長にて一般据置貯蓄業其他貸付をなし今や預金一億一千万圓に達し特殊銀行中第一流の隆盛を示して居る

北海道殖産合資會社 花園町東四丁目十九番地に營業所を設け社長渡邊治作氏卒先して諸公債勸業貯蓄債券有價證券擔保預金等の月賦販賣をなし隆盛に赴く同社は大藏大臣の認可あり

小樽造船株式會社 小樽區寺田省歸氏河野富重氏田中與五郎村木諸氏の計畫せる會社で本店を堺町に置き高嶋村に分工所を設け櫻井七郎兵衛氏分工場にありて卓越せる手腕で多數の職工を使役し繁忙を極めて居る

河野吳服店 稻穂町大通妙見川角に三層樓の宏大なる建物には同店獨特の陳列法を以て

常に顧客を吸収し殊に菊地支配人の明晰なる頭腦を以て營業をして居るので今や小樽一流の呉服店と稱へられて居る

大國屋呉服店 第一火防線通りの同店は支店なれど手広く營業をなし店員の愛嬌と支店長の發展商略とに依つて常に繁昌して居る

龜尾呉服店 色内町五丁目第二火防線通りの同店主龜尾政造氏は小樽實業界の重鎮で油屋支配人帳場に居て多數の店員を働かす營業振りは機敏で商品の廉價なると勉強は同店の特色

早川商店 色内町七丁目に店舗を有し紙、文房具、茶等を販賣し店主森正則氏は現小樽商業會議所會頭で本道屈指の紳商である

株式會社近江堂 花園町東四丁目で社長は川南重祐氏で書籍等の卸賣をなし全道及樺太に販路を擴めて居る

伊勢屋合名會社 入舟町は代表社員澁田貞次郎氏の店舗で輕便レール車輪及附屬鐵物等

を販賣して居る

北星社 花園町東三丁目の同社は渡戸助太郎村田榮太郎氏の合名組織で土地賣買金錢貸付を營業として居る

和田木材店 第一火防線通色内驛前で木材業を營む同店は和田源次郎氏店主で堅實なる營業をして居る

堤商店 山田町丸三印同商店は各荒物類を商し名物紅梅焼を賣出し評判宜し

大崎商店 入舟町大崎商店は各種菓子類を製造販賣し殊に賣出しの千代田あげは名物を以て知られて居る

笹田岩次郎商店 稻穂町大通り小印同店は各種日用品の卸賣をなし店主笹田岩次郎氏は現商業會議所議員である

駒板養藏氏 土木請負業大虎組の幹部として奮闘して居る同氏は宮城縣の人で現小樽消防組記長を勤め大虎組内の主要なる人材である

佐々木軍之助氏 花園町東四丁目五番地に土地賣買金融信托業を営む同氏は職務に忠實な人で義勇消防組の幹部や衛生伍長に擧げられて居る

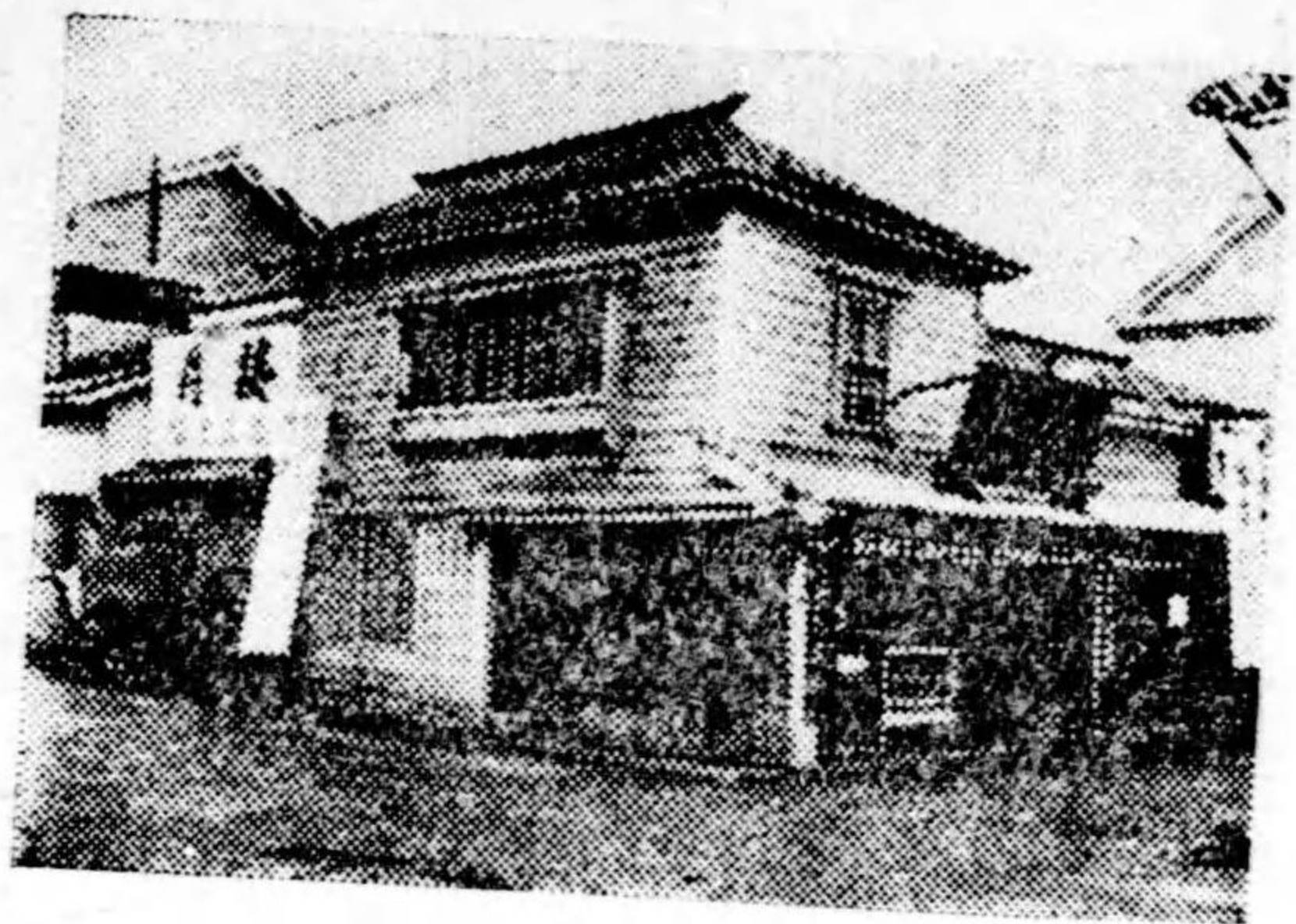
棧橋ビージャホール 棧橋前の移民休憩所樓上の同ビージャホールの經營者は井上米藏氏で愛らしきメイドによりて旅客は慰められ常に繁昌して居る

高島村昇月 高島郡高島村昇月は佐藤五郎兵衛氏の經營で性來義侠に富み自分で高嶋座を經營し其他種々なる事業に着手し高嶋義勇消防組頭で令名あり

梅屋 色内町屈指の洋物小間物化粧品卸問屋で同店特製の『梅印粉石鹼』は世に定評ある優良品で需要が多い店主村住三右衛門氏は小樽實業界の耆宿で地方公共に多年盡瘁して居る老紳士である

齋藤商店 稻穂町中央座向の同店賣出しのかき餅あらは製法他の模倣し得ぬ技巧で製法販賣して居るので好評を博し品評會では屢々賞状を授與されて居る

キマサ商店 花園町東一丁目の同店は家具椅子卓子等其他一切日常家具の製作販賣店で



日々繁昌して居る

梅月商店

稻穂町大通同商店は和洋菓子を販賣し梅月パン最も好評



川又商店 色内町四丁目九越同商店特賣の君か代半紙は徳用で品質優良販路が擴い

技巧界

藤田綱郎 (割烹師) 東京以北札幌豊平館の入江氏と併稱されて斯界に重きをなす有数の割烹師で小樽の北海屋ホテルに於ける獨特の調理は皆是れ十數人のコックを主宰する藤田コック長の周到なる匙加減によるのである君は横濱の生れ五番ホテルを振出し大隈侯邸禪寺レキホテル英大使館等に雇はれ開業に際し聘され厨房を主宰し今日に至るまでの間内外人の味覺に適する洋式調理は決して他の追従を許さじこの高評を博しながらも厨房に在て絶ず斯技を大に研究し傍ら今夏公



て技量を揮はし又武官邸獨逸ムンム公使青木子邸神戸獨逸チール領事横濱總領事獨和銀行ホーデン氏の司厨を歴巡して大正五年小樽ゲルトホテルに雇はれ居る事三年北海屋ホテル

會堂に開きし小樽西洋料理研究會主催の割烹品評會の牛耳を握りて同業者間に覇を稱へて居る君は斯界の大なるブイドである



吉田理作 (裁縫師) 小樽裁縫界の權威者として知らるゝ君は山形縣西田川郡鶴岡町に生る年少より和服裁縫に志し郷士に於て研鑽多年明治三十四年渡道小樽で獨立の和服裁縫業を營み現に①末廣屋呉服店の専屬工場となり今迄十數年内には多數の職工徒弟を養ひて家業益々繁榮の域に進み今や同業組合

の幹事として斯業のため貢献する事夥しく君の如きは實に得易からざる職人である。



兒玉賢次 (割烹師) 小樽屈指の旗亭花園町嬉野の厨房主宰し純日本式の割烹師として木道有數の稱ある君は渡道後大正五年小樽料理屋組合附屬の信友會を當時の會長柴榮吉氏等と共に設立し同七年以後三度會長に推されて斯界に

重きを有して居り同六年十月全道料理屋飲食店同盟會小樽支部長及同割烹職信友會長から感謝狀と記念品を贈られ今秋會長辭任に付組合から銀牌と金一對を贈りて功勞表彰さる。五十嵐要（建築師）大正四年以來小樽電氣



陳列場を經營して嶄然頭角を現はした君は神戸市に生れ關西屈指の建築師中島勘太郎氏の

門に入り同氏を扶けて重きをなさるゝ事多年明治四十年決然渡道小樽白鳥工業部主任として火山灰製造中寺田省歸氏に知られ爾來小樽區内の一異彩たる色内町曲辰支店や



沖盛三（瓦斯溶接業）

北門日報社の建築工事を完成して設計監督に非凡の手腕を認められし斯界立志傳中の人君は幼少より技術に長じ學校を卒るや夙く鐵道院に奉職し大宮函館岩見澤等の各工場を経

途を囑望される新時代の寵兒である。

渡邊仁太郎（染物師）君は越後新發田の出身で祖父以來染職を業としたが明治二十年渡道小樽入船町に居をなし『染吉』の名で染



物業を營み専心斯業に盡瘁したために家運年を逐ふて興り大正元年花園町の現個所に移轉し今秋新たに店舗を建築して只管技巧の進歩と業務の發展とを圖れる結果現に多くの職工徒弟を養ふ小樽屈指の染物業として各方面の注文常に殺到す。

ひ溶接業の擴張と共に昨秋乗若丸の蒸汽々關を製作して大に斯業の模範を示す君は日露役の勇士で勳八等に叙せられ盛岡市の人

倉橋清八（鐵工業）

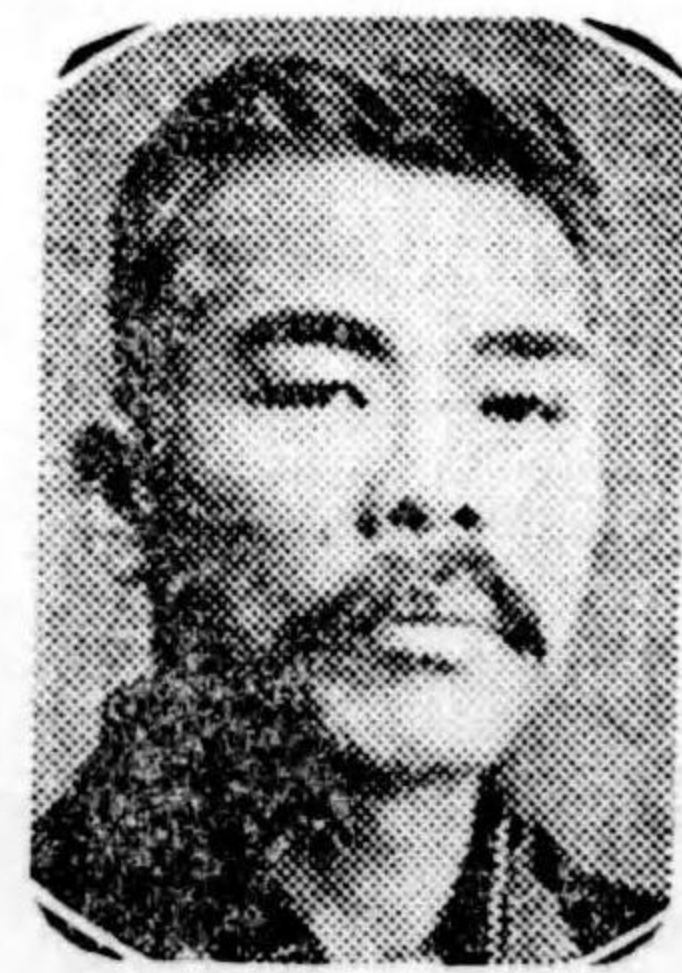


新潟縣岩船郡村上町に生る祖父以來同業を營む明治十八年渡道地を小樽稻穂町に轉し當時丘陵地なりし現個所を獨力開鑿して家屋

を建て爾來今日まで斯業を營み職工徒弟漸く多きを加へ業務益々發展し現に同業組合の幹事として重望を擔ふて居る君の令息も亦小樽鐵工業界の新銳と稱へられ且大に前

宮下藤吉（飾師） 先代は越後出雲崎の人
 明治二十年父君と共に渡道小樽に於て現業
 を創めたが爾來多年經濟界の消長に伴れ斯
 業の興廢定まらなかつたが居常精練の技と
 着實の經營振で着々隆運に進み近年製造本
 位を改めて製品販賣を兼營する事となり客
 年店舗を改築して地方部を新設す君は卒先
 同業組合を組織し其組合長の嗣子藤雄氏は
 君の後繼者である。

守本福吉（時計師）君は生粹の江戸ッ兒で
 幼より技工を好み十一歳で横濱に出で當時
 最も時計技工の進歩した同地で斯業を練磨
 し明治十六年開業せる本道屈指の金森時計
 店主に拔擢されて
 創業を扶け蒞蓄を
 傾注して居る事三
 年今日の金森時計
 店を大成せしめた
 功勞の大半は君に
 歸せねばならぬ其後横濱居留地シナイター
 時計商會工場に三年間研究し再び渡道して
 江差町に開業大正六年小樽稻穂町大通に時
 計舗を開業し今日迄五十年間最も卓越した



手腕を以て斯界に獨歩の地歩を占めて居る
 趣味は義太夫。



高橋正行（時計師）君は年少より發明工夫
 に非凡の才を藏し農事機關を發明して斯界
 の發達を助け日露大戰
 當時第十師團所屬時計
 及寫眞技師として出征
 歸郷後明治四十一年渡
 道大正二年小樽錦町に
 現業を營み同五年同業
 者を勧誘して小樽時計商工業組合を組織し
 幹事に推されて尠なからず同業に盡瘁し君
 が天職の手腕と不斷の努力とは期せずして
 今日の隆運を見たのである君は新潟縣下屈

指の大農に生る。

花野正松（鐵工業）君は越後北蒲原の出幼
 少で渡道小樽鐵工場に於て斯業の手解きを
 得修了後大宮鐵工場、吳海軍工廠、小石川
 砲兵工廠石川島造
 船所、東京池貝鐵
 工場大連暖房工場
 等を歴巡して大正
 二年小樽稻穂町に
 工場を創設して自
 ら經營の任に當る君は昨年上京ゴム製造機
 械を見學し今や其製作に努力す斯道に對す
 る君の蘊奥は極めて深く人格手腕共に斯界
 の珍。





瀧野榮吉 (杜氏) 君は一昨年資本金二十萬圓で緑町に開業せる北洋酒造株式會社(社長田中傳右衛門氏)の杜氏で二十三歳から今日まで三十年間斯業に従事して蘊奥を究め君の醸造せしミルト酒造會社の銘酒三『光泉』は一昨年の全道清酒品評會で一等賞を授けられた北洋會社の醸造に係る醗酒は別製『日の千代』上製『北京』の外に並製『北洋一』で造石高の最も多い『北京』其他を加へ本年の醸造高千二百石の見込だと酒の販路は道内及沿海洲で君は現に小樽杜氏研究會長で斯界の重鎮である。

林駒太郎 (杜氏) 君は元秋田山形で杜氏の腕を揮ひ渡道後札幌稅務督監局鑑定部の副島技師に就て斯道の奥儀を究め現に小樽奧澤町野口酒造合名會社の杜氏で今迄二十年間本道清酒界に多大の聲價を博せし『北の譽』は全道清酒品評會の都度一等賞に外れた事がない其他『養老』『誠一』『光』等一ヶ年の醸造高五千石余杜氏として二十余年間醸造には深い造詣を有する君は今や『北の譽』と共に野口酒造會社の一大誇りと知られて居る。

野尻市次郎 (杜氏) 小樽奧澤町岡田合名會社の杜氏で今迄十四年間造込の經驗を有し醗酒巴里其他の醸造に従ふ。

長谷川喜平次 (杜氏) 小樽酒造界の老舗として重きをなせる若松町安達吉平氏か明治二十七年開業後杜氏を勤め今迄十一年間造込に苦心し尙孜々として研究を怠らない第五回勸業博覽會で銀牌全道品評會で一二等賞を下らない『金龍山』『小樽正宗』『高砂松』『松緑』等は皆是れ君の手際で造込まれた同店の醗酒である君は大正八年小樽商工聯合組合から永年勤續證を授與され又本年全道酒造業聯合組合から彰表狀と時計を授けられた模範杜氏。

小樽靴工會 (稻穗町大通) 時代思潮に棹さした同會は資本家の壓迫を避け労働者の覺醒を促がし各自の生活の安定を得んがため互ひに勞力を提供し收入の圓滑を計り常に協和親睦を旨とし互助濟世の美を濟すため小樽の靴工が多數結束して設立したもので本年四月一日から直接靴の製造や修繕及販賣を開始した處が同會の最大特色であり且さうした他に今迄類例のない原價を公開して靴の原料原價と工賃の定價表を明示して一般需用者に頗る安い

靴を履かせると同時に靴工の所謂自給自足主義を實行するといふので開業以來毎日靴の注文に應じ切れぬ程の忙しさで現營業所は最早狹隘を告ぐる有様である同會員は甲乙二種に分ち會員別に依り權利は絶対に均等とし會の權利と業務は役員全部が連帶で無限責任とし會の製品は職工自身經營者であるから雇職工に製作せしむる側よりは責任觀念が強く同價格として製作の努力原料の撰擇に大差あるので尙更需用者の人氣を博して居る殊に會長高橋政吉氏は他の役員と一致協力多數の會員を大に激勵して『靴工會』の眞價を一層高むる方針で營業に努力して居る。

自動車學院（緑町） 優良なる自動車運轉手又技術士養成を目的とする北海道自動車學院は本年四月開院以來院長本澤得光氏が一意専心職業學校令に依り現社會に順應すべき職業教育の完全を期すべく努力して居るので技術修業の希望者漸く増加し居れるが同學院は速成科、別科、本科、特科の四種に分ち學地運轉科は一ヶ月本科は二ヶ月で卒業し遠隔の地より入學者は寄宿せしめて居る。

裁縫院（小公園通） 數年前から開院せるシンガーミシン小樽裁縫女學院は專意苦心研究の結果小兒服は勿論各種衣服の仕立法を改善し生徒の便宜を計り多數の技術者を招聘して學院教授、家庭出張教授、無料教授の三種に涉りて専ら最新式裁縫術の教授をなし普通裁縫科、高等裁縫科、刺繡科、研究科を各三ヶ月で修業一年で全科卒業生は希望に依り地方の裁縫學校及家庭教師に推薦し傍らミシン月賦販賣部を特設して居る。

青山理髮館（公園大通）同館は明治四十二年の開業で現在の店舗を新築したのは大正三年の暮、館主は既往十ヶ年間小樽理髮保健組合役員として多大の功績あるので一昨年組合から木盃を授けられた君は東京美髮會で斯業を研究し現に同小樽支部長である。



を研究し現に同小樽支部長である。

安田直吉（調髮師）君は夙より東京に出で武田理髮店に於て修業し明治四十年來樽して斯界に入り職務勉勵と品行方正なる故を以て理髮保健組合より屢次推賞され大正二年緑町に獨立開業後日曜會の役員に擧られ斯界に重きを有して居る、君は福井縣三國港の産。



に重きを有して居る、君は福井縣三國港の産。

堀藤吉（調髮師）明治三十八年決然渡道居を高島に卜して獨立開業以來茲に十有六年同業組合幹事として斯業に功蹟顯著なる君



は山形縣飽海郡酒田在に生る振出は同縣米澤市で後横濱市に出で二ヶ年間柴垣高賀理髮店に於て技倆を揮ふ現に高島村衛生組合伍長に擧られ公衆衛生に盡瘁して信望殊に高い

は山形縣飽海郡酒田在に生る振出は同縣米澤市で後横濱市に出で二ヶ年間柴垣高賀理髮店

川端伊三郎（調髮師）石川縣の人、君は九歳で本道岩内に轉住夙に理髮に志し十三歳の春小樽平川氏に師事し技成りて二十歳の秋歸岩同町天狗軒本店の業を扶け間もなく陸軍現役のため入營軍曹に昇進し除隊後小樽花園町に天狗軒の支店を開業す曾て理髮保健組合役員功勞者として表彰され現に軍人分會第十一班長の任に在て盡瘁しつゝあり。



秋歸岩同町天狗軒本店の業を扶け間もなく陸軍現役のため入營軍曹に昇進し除隊後小樽花園町に天狗軒の支店を開業す曾て理髮保健組合役員功勞者として表彰され現に軍人分會第十一班長の任に在て盡瘁しつゝあり。



網谷清吉(鐵工業)君
 は兵庫の人、長崎の田
 中機關工場を出て函館
 造船、函館船渠會社に
 入り色内町で獨立開業
 したのは大正三年、八年今の所へ移轉蒸汽
 石油發動機關の製作修繕業である。



名 物

タオル生産組合 (入船町) 有限責任小樽タオル生産販賣購買組合は昨年製造開始後道内
 各方面の需要漸増し此冬の如きは現在廿五臺の靴下機械、三臺の口織機械、タオル糸と地
 糸各一本並べて巻取る千二百本織の糸繰機械やタオル織機械及び都腰巻とオーバセーター
 機械二臺が晝夜間斷なく動いて各種の製造に忙殺さるゝ程の好況を呈して居り尙此生産事
 業は本道唯一のものであると共に確に小樽の誇りであると認められたので道廳では拓銀か
 ら三万圓の事業資金を出さして組合事業の發達向上を期して居り明年は之を内務省の低利
 資金十萬圓借資認可の申請中だが現組合長一戸謙治氏は工場主任の久保田彦次郎齋藤正英
 氏外多數の従業者を常に督勵して斯うした婦人の職業を漸く勃興させ道産奨勵の實を擧げ
 やうと鋭意努力して居る組合の電話一一六一番

海陸物産 (住江町) 北海々陸物産商會は資本金三十萬圓の株式會社で小樽と余市に製造工場を有し數の子粕漬、鮭新巻蝦夷舟箱入、筋子粕漬、生數の子、鱈助宗粕漬、筋子(春の製造品) 鯨や鮭の燻製、鯨雲丹、鯨春開、鯨身欠、櫻桃(夏の製造品) 鱈親子珍味漬、蝦夷味噌、柔魚鹽から、花折昆布(秋の製造品) 鮭新巻、鮭親子粕漬、同一尾粕漬(冬の製造品) 其他本道の特殊製産物を加工し陸海軍、滿鐵鐵道院用達及南北米滿鮮等に直輸出品として大に聲價を博して居る同社の専務取締役野田四郎氏。

小さくら紙 北海製紙株式會社製造發賣の芳香入小さくら半紙は淡、紅、水等三色の種類に分ち、衛生上欠くべからざる良品で一手發賣元は色内町山カ岩淵商店で全國到る處の小間物店藥種店に特約販賣店があり逐年需要激増して居る。

千秋庵 色内町同店は函館、札幌、旭川に各支店を有し本道屈指の和洋菓子の老舗で店主山中邦吉氏の經營宜しきを得日々隆盛に赴き今日に至り殊に手宮の古代文字に因んだ名菓や千秋パン、カルチョムパン其他甘納豆は皆同店特製の名菓で素晴らしく販賣を擴めて

居る。

寶泉サイダー (緑町) 本道著明の清涼飲料水で大正元年小樽稻穂町に酒屋を開業し神田文五郎氏が同八年製造開始以來今日では全道及樺太、沿道州、薩哈噠州等に普ねく販路を有し一ケ年間の製出高五萬打で優に他の先輩同業者を凌駕する勢へである。

三印滋養パン (住ノ江町) 一昨年開業した同店の製品原料は麥粉、砂糖、牛乳、ミルク、バター子外藥品を適度に鹽梅せし滋養食料品で精撰した原料と多年研究せし最新式の製法と相俟て一般需要者の味覺に適する日常生活必需品として今や好評噴々現に一ケ月十萬枚の賣行あり全道は勿論薩哈噠州に廣く販路を有して居る。

旅館

北海屋ホテル (稻穂町) 本道交通の近時異常なる發達に伴ひ此等交通機關と密接の關係

ある旅館の如き特に新時代に適應した設備の急務であるは勿論小樽の如きごとくしても將來世界的重要な港灣にして當然最新の設備を有する大旅館の必要あるを認めて小樽區の有志等が一昨年建築費十一万圓を投じて當區に於



て而かも旅館として舊來の宿弊を一切打破し館内は七十餘個の客室を有し暖房室の設けから通風採光の點は勿論第一旅客の味覺に適した純西洋式の料理は別記同ホテルの厨房を主

ても屈指の建物といはるゝイングリツツユコツテイジ式で日本化した洋風の建築である同ホテルを稻穂町東五丁目に創設開業して斯業者を一驚せしめたのである同ホテルは本道中最初の試み

宰する前田綱郎氏獨得の調理法にて、常に萬人の嗜好を唆り萬事遺憾なく整へ眞に理想的で一度同館に客たる人は皆設備の完全せるを推獎せざるはない確に小樽の大なる誇りである、尙本年資本三十万圓の株式會社を設立し旭川の師團通りに同ホテル支店をも經營して居るホテルの總支配人高橋直孝氏は元臺灣總督府所屬臺灣ホテルを専ら經營して非凡の腕を揮ふて高等官待遇され且歐米航路船天洋丸事務長として卓越した技量を示した經歷ある人材で同ホテルは君の才能に依て今後益々大發展せらるべき經營振りを必らず發揮するだらうと一般に期待されて居る。

東屋旅館 色内町六丁目元丸三泉屋の跡を引受け山正旅館と改稱經營して居る館主椎熊三郎君は曾て小樽新聞社會部記者として久しく敏腕を振り其後當區の仲買商岡田正三氏に拔擢されて信用厚く開業するや旅館の設備は悉く時代に適應せる新らしい試みで舊來の營業方針を打破し萬事旅客本位で便宜を圖り居る事とて絶ず繁昌して居る君は元來政治に興味を有し立憲治下の公民として清い生涯を樂むには恰好の人材で野球界の先驅者であり小

樽に於て最も新時代を理解した青年紳士である。

高島屋 (稲穂町) 今から二十五年の開業で本年稲穂町東六丁目に立派な改築を行ひ客受よく益々繁昌して居る店主川上金太郎君は義太夫に興味ある人で同業者中實に新進氣鋭の人物だ。

交 通 界



市街自動車 (稲穂町) 樺色の小樽市街自動車株式會社は本年九月五万圓の資本金で開業車輛は現在八臺で明年四月迄には十五臺に増車する大計畫だが今の處運轉手と女車掌各十五名が優良な技倆と親切丁寧な客扱ひと殊に一臺十二人乗の車輛はフォード式で頗る乗心地よく毎日晝夜乗客織るが如き繁昌を極めて居る専務取

締役は最上吉藏氏で鈴木一平、高橋利藏、秋山良藏、大野荒次郎、宮本鐵治、宮腰藤太郎松原才次郎諸氏は同社の幹部連。

乗合自動車 (稲穂町) 青色の小樽乗合自動車合資會社は本年六月の開業で車輛は現在八臺、連轉手十五名、女車掌十四名で赤自動車と優に拮抗する營業振を發揮して居る同社は今後益々業態を改めるは勿論更に大發展を遂ぐべく十萬圓に増資の上株式に變更増車及車輛の設備に改善を加へ飽迄乗客本位として小樽區に於ける交通機關の先驅者たる使命を果す同社の方針だと代表社員は齋藤氏で、營業主任佐々木氏は小樽に乗合自動車を開業するに就て幾多の犠牲を拂ひ自分の素志を串徹したものだ。

小野自動車 (緑町) 以前錦座自動車部に於て重きを置かれて居た小野秀雄君經營の自動車部は昨秋獨立開業以來逐月繁昌し今日では他の同業者を漸く凌駕する程の好況を呈し小樽交通界の花形といはれて前途益々發展の域に達して居る小野自動車に御用の方は二四八七番へ。

藝

術

界

竹本廣太夫 (義太夫) 函館生れ手解きは鶴澤廣吉で十三歳の折東川町の旭館で廣兼の三味線でウロ覺への『三代記』を語り子供心にもハツとしたさうだが函館に居て永らく義太夫天狗連の大關と許され十九歳で大阪文樂座へ修行に出掛、當時日本一といはれた盲人住太夫の藝を受継いだ故竹本染太夫に嚴格に教へ込まれて養父死亡後錦を着て函館へ歸り巴座披露興行の際初日に『野崎村』を語つたが流石本場で叩き上げた腕前多數の聽者を嘆賞せしめた遺憾な事には先年東京宮松亭で眞打が艶語りの竹本朝太夫、切前が同和國太夫、廣太夫がスケに出る筈だつたが養父死亡のため興行されずに終つたと小樽へ落付たのは大正六年五月で第一回の大浚ひは同年十月演藝館で得意の『寺子屋』『河庄』『湊町』を語り爾來今日まで幾多の慈善會や義太夫會や各演藝會に出演して其都度本道義太夫界の最大權

威者たる藝道の眞値を發揮し殊に『壺坂』は至藝である。

鶴澤重吉 (義太夫) 師匠は江差の人、越後の鶴澤鶴重の門に入つて重吉の名を貰ひ



後東京の豊澤仙十郎、竹本小政に弟子入りし一流をなしてから、大正七年香伯事竹本若太夫に師事し『堀川』

『御殿』『明烏』『本藏下郎』等を研究したとして女師匠として語りも三味線も教授し又他流の人々には合せもにて今では小樽に於ける師匠仲間で重きをなして居る師匠の令嬢

柴田春榮さんは井上春勢の門人で琴曲教授の腕前である。

竹本繁八 (義太夫) 十三歳の時義太夫界の名人故竹本彌太夫と三味線引豊澤良助師



匠が手解きで子供時代は彌太夫や源太夫に師事し十四歳から十六歳まで文樂座に居た今の源太夫が源子太夫

時代に女太夫の源之助等と九州地方を巡業して歩るき、當今女義界の人氣王豊竹呂昇一座の重鎮末虎の表弟子となり裏の師匠は彌太夫と源太夫三味線引良助等に厳しく仕

込まれ粒々辛苦して技を究めた、初高座は『鎌倉三代記』と『八陣八ッ目』はかり毎日繰返して語つたものだ、二十一歳まで大阪つぼみ連の花形として當時の堂摺連を騒かし二十二歳の時大阪新地で繁八と名乗り十數年間華やかな藝者生活をなし小樽へ來たのは一昨年の夏今ちや小樽隨一の義太夫藝妓で押も推されもせぬ分見の幹部で香伯事竹本若太夫に就て屢々義太夫を研究し『忠臣講釋』其他骨の折れる時代物が大の得意で斯界に重きを置かれて居る。

小野磨 (義大夫) 小樽の素義界で義太夫



して藝道を研究した上で玄人の壘を摩する

節の眞趣を理解し俗衆の評判を少しも氣にかけずに少數の聽巧者を憚り其鑑賞力を目安と

だけの技倆を現はさうと心から意氣込んで居る様に實際見受らるゝ君は小樽の所謂旦那藝中屈指の語人で素義界の大關である重吉師匠に就て毎日缺かさず熱心に語り込んで工夫を凝らしてゐる君は今迄三四十段上げた中に最も得意な語物は『宗吾の責』『寺子屋』『合邦』『すし屋』『明鳥』等で殊に『宗吾の責』は面倒な皮肉物を玄人も及ばぬ程語り活かすのであるそれに芝居と來ては決して人後に落ぬ程の熱心家で慈善會や其他特殊の演藝會には大低外れたことなし今年も北門日報の名人會で柴田如峯氏の春藤玄蕃、櫻川市孝の千代、分見一作の戸浪、小野玄人の武部源藏で『寺子屋』の一番大役松玉丸を見事に演つて喝采を博しました柴田氏の演劇大會で『床下』の男之助『皿屋敷』の鐵山『五人男』の駄右工門等、座頭役をなんの苦もなく演り通し二度共錦座で素人芝居のために氣を吐いて人意を強ふした君の義太夫趣味と共に小樽で定評あるは政治の眞義を理解して選舉ある毎に政友派のため献身的に運動し立憲の本義を全ふせんと努力して居る小樽逐鹿界の名物男だ。

桃の家姉妹（北斗見番）小樽の藝妓で義太夫の浚ひに出る御定連は色見小太郎、二葉六彌、勘彌、共檢蘭丸、秀奴、樽見一郎、分見



一作位なものだが桃の家亀千代裙は此中で一番稽古が眞摯で且頗る熱心だ師匠の廣太夫は

未來の太棹藝妓として現に囑望して居る語物も玄人向きの『圓覺寺』や『國性爺』を本行で語り込まうと意氣込んで温習會に出る時の眞劍はまた格別だ一藝妓としての亀千代

は色見きつての半玉である三郎を妹に持つ仕合せもので性來一流藝妓の素質を持って居る三郎は美しい顔と優艶かな姿の持主だが



それであて少しも誇りがましい所が見へない其處に此妓の長所がありこれから後、最も賢

い最も安全な道を歩いて桃の家の支へ柱になつて行く誇りが見へるのだ『此の妓は藝者らしいといはれてそうして女らしいといはれたい願ひであらう。』

木村照子（箏曲）師匠は明治四十五年か

ら小樽で琴の教授をして居る山田源家元萩岡松園派で屈指の人、木村門下で奥許の弟



子は今迄二十餘名現に岩見澤町で琴の教授して居る松島やえ子さんも其一人、小樽で琴の

師匠で數ある子に斯界の代表者を求むれば先此人であらう何時も慈善會に出演して屢次感謝状を授けられ且斯道の向上を計るに頗る献身的で師匠としての人格者だ。

八住小吉（鳴物）小樽で鳴物長唄の師匠

といへばすぐ八住さんと聯想さるゝ程名の通つた人、君は本道長唄界の最大權威でありました斯道を普及した恩師である君のお父さんは吉住小八といつて江戸は元の猿若三座の立唄の頭取を勤めて居た羽振りから家元の吉住小三郎を凌ぐ程の勢力で且斯界の名人といはれた格式のある家柄だ君は八歳の時からお父さんに連られ始めて中座へ出勤する様になつたは君が斯道に入つた第一歩であつた其の翌年君は遂に田圃の師望月太佐吉の所へ弟子に入りそれから十三歳

まで五年間懸命に修行したが望月の師匠山の手へ移つてから九代目田中の家元で其頃歌舞伎座の太鼓の立て名人であつた傳左工門の弟子となり藝名を福佐と改め歌舞伎座へ出勤した其當時のお囃子連中は長唄界の粹を聚めた名人揃ひてそうした名人の間に介して十數年間日夜研鑽を怠らなかつた君が今日日本斯道界の第一人者と自他共に許さるゝ位の藝術家となつたのは其時分の名人連中に學ぶ所が多かつたのは勿論である、其後門閥の不平から地方へ出る事となり北海道へ渡つた動機は盛岡町本町の藝者家で稽古をつけ内福座の上げ浚ひ中歌舞伎座仲間て札幌で死んだ杵屋六五郎が是非にと本道へ連れて來られ後に札幌に止まりいく代及札見番、新見番、東京庵の藝者に稽古をつけたのは明治四十年で其後四年間を札幌で暮して居たが今では開陽亭專屬の鳴物師匠として小樽へ落付傍共立檢番の藝妓を始め札幌へも今まで通り出稽古をして居る君の名は父吉住小八の名儀を葬むるに忍びず其名を逆にして名乗つたものだ小樽へ來て十二年間、始終一貫した所の藝術的力に依て本道の鳴物は今日の如く向上の域に達して居るのだ君の名取弟子で今居るのは小八七（共檢米

治) 小八重(同千代松) 小三司(同小松) 八住小右助(同源平) 小登治(同もと) 小喜知(かね子) 小摩治(同小蔦) 吉彌(同) それに小福佐といふは開陽亭豆太のことだ君は芝居にかけても本職を蹴落す腕前で殊に『五人男』の辨天小僧は仕草は世話物で古今獨歩の名人五代目尾上菊五郎の穴を行き見巧者をあつといはして居る。



清元延清繁 (清元) 北斗見番の幹事長大吉裙は生粹の江戸ツ子で育ちは静岡、三十年前のお雛妓時代には静岡大東館で一代の英傑宰相故伊藤春畝公のお座敷に度々招ばれた經歷ある名妓で伊藤公が先年今の李王世殿下に隨行して渡道した時に札幌のいく代に宿り大吉裙を態々招んだが丁度見番の騒ぎで宴席に侍することが出來なかつたのを今以て残念で堪まりませんといつて居る大正七年家元から今の名を貰て小樽花柳界に於ける唯一の清元名人で來春花々しく其名披露目大會を催すさうだが藝といひ座持といひ若ひ時には維新の元勳の方々のお座敷へは大抵呼ばれて最負になつた同裙は

本道での代表藝妓だ。

堅田喜三代（鳴物） 今年の本道藝壇を彩つた九月十二日の全國料理飲食同盟大會第二會場小樽の餘興は花柳界の暗雲大に低迷した關係上北斗見番側でのみ演ぜられたが其際同分見番副幹事長三筋事堅田喜三代裾が餘興中小樽見番藝妓連の『末廣狩』は磯間壽吉の振附また『漁樵問答』は杵屋勝登羅の節付澤村紀久催し満員の盛況を呈した長唄の方も家元がら杵屋勝登久の許し名かあり小樽花柳界きつての鳴物と長唄三味線の名手で北斗見番側には頗る重きをなして居る、齒切れのいゝ代表藝妓だ。



壽の振付で師匠の堅田喜惣治の力添へで鳴物を一手に引受て畢生の腕を揮ひ名前が一時にバツと擴まつた同裾は一昨年春家元の名を貰ひ同九月錦座花々しく鳴物の名披露目大會を

西川仲司（舞師） 今から二十年前小樽へ來て踊の稽古所を設け稻穂見番や中央見番專屬師匠としてよく其本分を盡し明治三十九年春稻穂座で第一回の舞踊大會を催し五日間満員の盛況を呈した師匠は藝の上に於て他見番の藝妓より常に遜色ある稻穂町藝妓の技藝向上に頗る苦心し藝道奨勵に献身努力したが時機未だ到らず一時失望して大正三年から六年まで青森で藝妓に教へ込んでゐたが七年一月再び小樽へ聘せられて今日に至つたが師匠の効は空しからず現に小樽舞踊界の代表者といはれて居る中見はじめや三福其他多數の立方を出して居り殊に晩年を飾るべき満二十年記念及中見專屬を退き獨立して稽古場を設立披露演藝會は本年十一月小樽各師匠連後援出演の下に錦座で花々敷く演ぜられた。

丁字家はじめ（中央見番）

踊は七歳の時、巴美作治が手解き其後松賀龜吉の弟子となり九歳の時住吉座で松賀派の大濠ひを催した際に『高砂丹前』の奴が初舞臺西川派になつてから踊がメキメキと上達し花園座で春子の静御前で狐忠信一作の袴垂保輔で平井保昌、一昨年秋中央座で催した中見藝妓獎勵會では三福の墨染で關



兵工、金八の小紫で白井權八を演じて其都度好評を博し殊に本年五月『樂天地』主幹柴田如峯氏の北海タイムス社引退記念公演大會で『保名』を踊つて狂亂を立派に藝術化した姐さんは中見きつての代表藝妓だ。

踊の豆太（共立檢番）

共檢隨一の賣れッ妓豆太は小樽花柳界に一大王國をなせる本道第一流の旗亭山の上町開陽亭を背景とする小樽の名妓である現在六百の藝妓中、實際藝で立つて行く眞の藝妓を數へれば誰しも曉天の星も當ならざる感じかするだろう其中にも豆太の踊か踊の豆太かといはれる位に定評ある豆太の踊と來ては小樽ばかりでなく確に本道藝術界の大きな誇りである豆太をこれまでに住



回技藝獎勵會の四日目で美代吉、糸八、米治其他多勢の地方鳴物に向ふへ廻して十分に踊りぬいた『外記猿』だが觀衆はヤンヤと喝采の雨を浴せかけ大喜びて藝術氣分に浸つてゐたが其際どうも器用にまかせて踊の妙所を失ふ場合があるのは玉に瑕だが體のこなしは勿論

足の運びや手振の工合如何にも巧者で斯ういふ質の踊はともすれば餘り技巧に捉はれ過ぎ
て肝腎の立て分けをキチンとするだけの用意に不足があつても優にそれを消して行くだけ
の藝力であれ位洗練されてる豆太の踊は今後研究次第で玉成されるのは勿論で小樽舞踊界
の虫だと激賞さるゝのも當然だと思つた、其後演藝館で見た『道成寺』は豆太としての出
來は中の上だが今年の春櫻川市孝同六兵工の名披露目演藝會を演藝館で演つた際に『保名』
を見たが初めて舞臺へかけたのと病氣を冒して出演した特殊の事情があるのに面倒な狂亂
物をあれだけ扱したのは流石に豆太は踊の天才だと今でも泌々感とて居る、豆太はさうし
た藝妓で開陽亭の秘藏娘だか豆太に目のない宮松女將は毎年上京、踊の家元藤間勘翁の養
子市川幸四郎に直仕込みの新らしい踊を修行して益々技を磨いて居り、また本道藝術界の
最大權威八住小吉師匠に就いて毎日鳴物を練習して自分の腕を鍛へて居る。

小常とお照 (踊) 豆太が天才でありお照は磨けば磨く程光る藝術界の玉である此兩妓
は開陽亭で振り離すことの出来ない小樽舞踊界に於ける立方の代表者である編者は今迄の
演藝會で豆太と小つるに搦んで『名世勢』を踊つた時にも三人の立方が充分踊りぬいて豆太
と異つた持味を發揮し
今春錦座で北門の第二
回名人會を催した際に
自分よりは踊の先輩者
である小常と二人で『
三社祭綱打の漁師をも
踊界に恐らく獨歩の地位を占むるに足るだけの藝であることを舞臺藝術の上に表現して觀
衆に感銘を與へたのである豆太が開陽亭を背景とする小樽の名妓であると共にお照も亦宮
松女將が眞の藝妓として自負するだけの實力ある近き將來の代表藝妓である小常は札幌い



く代の秘藏藝妓として多年幌都花柳界に獨特の地歩を占めて來た代表者で踊にかけては同年輩の藝妓中本道屈指の立方であり且踊を立派に藝術化する腕前がある本春札幌の錦座で故松賀龜治師匠の追善演藝會のあつた際札幌の踊人政彌と共に『連獅子』いく代の秘藏娘で札幌の大花形桃子と一所に『勢獅子』を踊つたが前者は狂ひ獅子を憎い程巧みに仕活かし後者は桃子の氣組を少しも弛めさせずに踊を光らしたのはに慥に小常の至藝であり豆太と小常とお照は開陽亭の三絶であるさうした代表者揃ひは何人も驚異の眼で迎へる事實である



分見一作（俠妓）本名は菊地キク子、今年二十七の六白金性である壽都生れて其時代には大した流行つ子ではなかつたが其後古宇で一時場所藝者をした上句岩内て有名な金盛樓の抱藝者となり其當時から彼女は段々賣出たのだ今から三年前小樽分見へ箱替して來た彼女の數奇な運命は今までいろんな社會の因縁にまつはられて年の割には沖に漂ふ捨小舟同様浮世の荒波に翻弄されたのである、今から十五六年前

本道の河合武雄といはれた新派の立女形堀井四郎一座の子役となり各地を巡業し居た彼女は永い間舞臺生活に没頭した時代から彼女の芝居心は殆ど恒久的に培はれたものと見へる或人が興業主て女の子供芝居を組織し本道各地を興行して歩いた子供芝居の座頭格で到る處好劇家の高評を博した彼女は『市原野』の袴垂保輔『太功記』の光秀『千兩幟』の鐵ヶ嶽おとわ、稻川『寺小屋』の武部源藏『忠臣藏』の大役其他長唄、義太夫なんでも座れの腕達者演る度毎に役者裸足の腕前を見せ劇通の溜飲を下げたものがさうした華やかな趣味の生活も仕切れずに藝者となり現在では小樽分見の一作といへば俠妓として粹界に名が知れ渡つて居る、堀江一座の大立者福田榮次郎の女房おツナ(三三)さんは藝者上りて彼女の姉である一月中央座へ堀江が藝術界の復活者として興行の際堀江と義兄に花を持たせべく百數十圓の自費を投じて立派な花環二個を舞臺へ飾り衆目を注がした彼女は斯うした氣風の藝者で今春錦座で北門日報の名人會があつた際素人の小野玄人を相手に『寺子屋』の戸浪を演つて武部源藏をウンと光らした柴田氏の演劇大會では『千兩幟』の鐵ヶ嶽小桃の稻川を引立た。

鶴壽（長唄） 妙見河岸料理屋亀鶴の秘藏
 娘て分見第一流の花形であり賣れッ妓であ
 る鶴壽は藝にかけても小樽六百の大小藝妓
 中決してヒケを取らない真正の藝
 妓て殊に長唄と來ては東京の家元
 から杵屋勝登茂の許名があり今春
 其内披露をした程の牙へた腕前て
 何時の長唄大會でも三味線を弾か
 しては小樽若手藝妓中の第一人者と推すだ
 けの實力を持って居る昨冬錦座で松賀派の舞
 踊大會があつた際に龜鶴の文ちやん外大勢
 の童子を相手に立三味線は故榮龍、立唄三



三子、開陽亭豆太事小福佐の鼓、源平の太
 鼓、かね子の太鼓で『安宅の松』の辨慶を立
 派に大きく踊つたのと優しい柄て氣強く見
 せて舞臺藝術の誇りを示した
 のはよく／＼藝に熱心なから
 だと思つた當時ツク／＼感じた
 鶴壽のやうな立派に舞て押通
 す藝妓は小樽に少ない彼はさ
 うした名妓の素質ある若手の代表藝妓だ。

惠美蝶（小樽見番） 今小樽に居る旭川の藝妓中で長唄の勝和歌（色見）と共に小樽藝界の
 双壁である樽見惠美蝶の踊と芝居は旭川歌仙師匠の秘藏弟子でミツシリと仕込まれたから
 で長唄物は随分と數を扱し撥の捌きも慥かなものだ彼は今年十九の花盛り顔も相當、心も
 シツカリもので今藝妓を廢
 めた元旭川丸サ見の副取締
 で本道の名妓といはれた糸
 八師匠を小さくした如うな
 女だと評するものがある彼



は十六の春迄歌仙師匠の孫娘丸サ見
 の喜久榮等と鹿の子の振袖も弛わに
 手拍子揃ひて踊つたものだが其踊の
 優艶さやんわりした曲線美で型の極
 りも圓味があつて巧みなことは旭川
 三百の紅裙中年増では萬造、文彌、若手では、喜久榮等と數へらるゝ程の踊人で先年佐々
 木座で樂藝會のあつた際、喜久榮の浪華次郎作事石川五右工門、小桃の吾妻與四郎事眞柴
 久吉で『戻り駕』のかむろを踊つたが小桃などはスツカリくわれて了ひ喜久榮と好一對の踊
 の名手であることを其場で立派に裏書した位の見上げた腕前殊に『鷺娘』は踊を美事に藝術

化した小樽へ来てから彼は今夏錦座で今の『樂天地』主幹柴田如峰氏の北海タイムス引退記念の演劇舞踊大會を催した際『白石嘶揚屋』の信夫と『千兩幟』のおとわを演つたが二役共に他の相手よりは圖抜けて光つた小樽で恵美蝶位芝居の旨い藝妓はないと編者は誇りがましく思つたのである彼は藝にかけては小樽の若手藝妓中の代表者で樽見隨一の花形であり賣れッ妓だ。



大山團州 (映畫説明者) 編者は一昨年秋公園館で今の錦座舊住吉座主故岩瀬佐吉氏の記念碑建設追善興行のあつた際に小樽各館辯士出演の活動舊劇『野崎村』坂田光風のお染、水野松翠の久松、金太郎のお光で説明したが中で久作が最も傑出して居た後でそれが君だと知れたのである十九歳の時東京小石川區喜樂館を振出しに一番長かつたのは本郷區芙蓉館で開館當時から出演しそれから新潟の大竹座、長岡のいしころ館を歴巡して一昨年十月小樽富士館の主任に招聘され本年四月から電氣館で日本劇專

門の説明者となり愛活家を唸らせて居る君は曾て東京神田錦町錦城商業學校出身で一時稅務官吏や小學教員、通信社や雜誌の主幹で相當手腕を揮ふたものだ説明は純日活系だが三年純西洋物も手掛た事がある尤も得意なのは『壺坂』『沼津』『寺子屋』は皆當り藝で昨年九月中央座で北門日報主催の小樽技藝名人會のあつた際に『安達三』の貞任と宗任で横綱金太郎の袖萩や八幡太郎を浚つたのは至藝の賜物だ。



横綱金太郎 (映畫説明者) 電氣館の主任辯士で小樽へ来てから足掛四年今ちや一番の古顔である東京淺草三友館が振出で一時公園館にも出て居た君は斯界で人氣を博した名物男で賣名にも長けて居り新派悲劇『琵琶歌』や舊劇『先代萩』など日本劇専門の映畫説明者で故柳川春葉氏傑作『生さぬ仲』の説明は小樽キネマ界稀有の大人氣で迎へられたものだ。

秋葉溪水 (映畫説明者)

君は大正三年横濱館を振出しに仙臺の世界館一番長いのは郡山の
大正座に三年間、本道は一昨年十一月札幌エンゼル館が皮切だが小樽電氣館で賣出し其後
神田館主任となり今春若松市の大和館に招かれ今は錦座の日本劇映畫説明を専ら擔當し同
座獨特の上映松竹合名會社特作キチマの眞價を高むべく一意努力して居る君の得意は山本
嘉一出演新派悲劇佐藤紅綠氏傑作の『俠艶録』や舊喜劇『彌次喜太』で常に眞摯なる態度で映
畫劇を藝術化さうとする説明振は君の最大特長である。

梅田友次郎 (追分節尺八)

君は昨年八月三日東伏見宮同妃殿下御旅館小樽富岡町藤山要
吉氏本邸に召出され追分節のバウイオリン名人近藤大助氏と共に多年濫輿を究めたところ
の江差追分節御前演奏の光榮に浴した最も名譽ある藝歴を有して居り又今春東京蓄音機及
帝國蓄音機會社から招聘されて獨特の妙音を蓄音機に吹き込みて帝都の人氣を博し其後三
光堂から再び招聘されて追分節尺八獨奏及安來節の鳴物を蓄音機に吹き込みて、斯界の好
評を博し尙松前三下り節の音譜を君自ら創作して今や全國に普及し其妙音を尺八に始終通

はして居る君が大正七年春以來今日まで本道追分界に何程貢献したか知れないのだが今では
本場の江差以上に追分節の全盛地といはれて居る小樽追分界に君の如き日本一の尺八の名
人が現はれたのは本道斯界の大きな誇りである。



野口梅溪 (尺八)

本道尺八界の新人で君は大正四年北大水産專
門科在學中西園派尺八の名手札幌の末松梅園師が手解きで二年間
修業して許しを受け後西園派の勃興地たる名古屋で安福藤山師に
就て研鑽し大正七年來樽當時は藤谷清造派の琴古流が琴にのみ合
奏することが流行して居たが君は三味線に合奏することに一意研

究し今日に及んだが君の覺へ込んだ曲目は長唄十五、端唄三十五、其他琴曲數十種の中最
も得意とするは『吾妻八景』『秋の種草』『鶴龜』『松の緑』等で曾て妙見町色内亭で末松師と合
奏したのが皮切だが君は拓銀支店に勤務し明晰なる頭腦で日頃精勵恪勤して居る傍尺八の
眞趣味を體得し絶ず熱心に研究して居る。

近藤大助 (バイオリン) 本道藝界に於て大なる誇りである君の妙曲は現に一昨年八月三日小樽富豪藤山要吉氏本邸に召され畏くも東伏見宮殿下の御前で尺八の名人梅田友次郎氏等と名曲江差追分節演奏の光榮を荷ふた難有さに依て十分に認められやう君は初め仙臺市立音楽學校で斯道を熱心に研究し自ら追分節のバイオリン合奏音譜を作りて造詣が深いのみか慈善演藝會に出演して屢次感謝状を授けられ梅田氏の尺八と共に本道追分節界の双壁である君は色内町二丁目到店舗を有し全道に販路を擴げて居る。

櫻川市孝 (幫間) 君は元來幫間出の藝人ではなく前身は東京落語界で腕を鳴らした事のある落語家である現代落語界の名人柳家さんに就て子供の時から修業した生粹の江戸ッ子で落語の方では小太郎から傳枝となり次に小團次芝樂となつたのは明治四十四年で十五歳の時日本橋の立花亭で『手紙の無筆』が君の初高座だ芝樂時代は君の最も全盛期で東京其他到る處大人氣で迎へられた『猫の馬場』や『猫十』など小さな畑の物が十八番で巡業時代小樽の最負連から是非來いと度々勧められ小樽で落付かうと決心し恰度今から四年前に腰を据



へ今では小樽に根が生へ共檢所屬の男藝者で其お座敷は小樽花柳界きつての人氣王といはるゝ位に持て囃されて居る君は今年の夏幫間の總元締東京柳橋の櫻川三孝今の三樂の許し名披露演藝會を演藝館で催し素晴らしい盛況だつた君は根が落語家だけに何處か高尚な所があり同じ演藝趣味を解するにも謠曲とか長唄、義太夫それに落語などを好む者は他の低級な趣味に親しむ連中とは其間大に懸隔がある小樽の花柳界の客筋で和ならぬ持味を出して居るそれに芝居も器用で『妹背山』の鱧七『濱松屋』の南郷丸力殊に寺子屋の千代は全く玄人、錦座の名人會に一人で舞臺を浚つた腕前見上げたものだ。

櫻川六兵衛 (砲臺) 十七歳の時、東京落語界頭取今の化柳事春風亭柳枝の弟子となり上野鈴本が初高座で初の名は雀枝次が盛で今の櫻川市孝が柳家芝樂時代に一座し其後柳家小

團治一行に加はり演藝館へ出たのが小樽へ落付く縁となり大正五年蝶坊と名乗つて末廣見番へ出てから今の様に人氣が湧き立つたのだ落語界へ身を投じ



ない以前は三井物産會社石炭部や株式界生活した事もあり眞面目な經歷も持て居る今の名は幫間の家元櫻川三孝から許されたもので共立檢番所屬の男藝者、喜劇と來たら何時でも舞臺を凌ふ腕前、人氣のあるのも無理はない。

てりふりや(履物商)花園町大通の同商店の主人小田君は本業勉強の傍、諸演藝に頗



る趣味を有し慈善會や演藝會には小樽の素人芝居の熱心家として見物に大もて寫眞は

『床下』の仁木彈正で錦座の檜舞臺を出演當時一人で背負つて立つ程の大意氣込みで看衆をヤンヤといはせ寺子やの權助も共檢相氣智姐さんの涎くりと共に大喝采を博した名物男だ

興行界

錦座 (花園町) 小樽函館札幌旭川の各錦座主岩見永次郎君は嘗に本道興行界の一大彗星であるに止まらずまた實に我國有數の興行師だ君は故池田金五郎が函館寶町の池田座經營時代に人となり池田が死んでから今迄池中に潜むで居た蚊龍の如くメキメキと頭角を現はし先づ舊遊廓蓬萊町に巍然と聳ゆる大建物が出來た之が後來本道キチマ界に一大王國をなすに至つた活動寫眞常設館の時代の先覺者である其後に於て池田座を買入れて大改築をなすと共に岩見興行部を常設して本道興行界を席捲すべく着々其歩武を進めて來た多年の奮闘努力に依り殆ど贏ち得た全道に亘る有力なる興行地盤の所有者として今日では獨歩の地

位を占め本道で大物を見せてくれるのはなんといつても錦座に限ると藝術愛好者から常に讃嘆の聲を放されるのである君が次第に發展して函館から小樽に興行勢力地盤を擴げて來た大正六年六月前座主岩瀨佐吉病死後劇場を引受たが他常設活動寫眞の盛況に押されて一時悲運に陥つた住吉座を佐藤市太郎から買入れ大普請をして舊來の面目を一新し翌七月小樽錦座と改稱舞臺開らきには現代歌舞伎國の最大權威者であり世話物では日本一と定評ある關西劇壇の第一人者中村鴈次郎、女形で名人視せらる中村芝雀(今の雀右衛門)大一座を上て好劇家を湛能させ七年は帝劇の最高幹部で當代女形の指導者たる近代の名優尾上梅幸歌舞伎界の所謂新劇派の頭目で古今獨歩の名優故市川團十郎の一時後繼者と擬せられし松本幸四郎、名優の名を受繼いだ澤村宗十郎大一座昨年は松本幸四郎と我國の新劇創始者として演劇史上に其名を飾られるのみか其効蹟を永久認めらるゝ歌舞伎劇界唯一の新人市川左團次大一座と我國喜劇界の最大權威といはるゝ喜劇の元祖曾我家五郎また本年は中村鴈次郎と當代女形の人気王と稱せらるゝ中村福助中村魁車大一座を上て其都度地方人をし

て藝術上の饑渴を大に満すことに努めて居る本道興行界で君は偉大なる藝術上の犠牲者である三府、神戸、横濱を始め九州、中國、東海道等の著名都市には既に直營劇場を有して東京大阪の各參謀部采配の下に各地との連絡を採り事業の發展に努めて來たが本道に未だ自社關係の劇場なく偶々岩見興行部の手に依て專屬大芝居の渡道を見るに過ぎなかつた今迄屢々錦座買収の交渉したけれ共不調に了つて居たを本年十月、松竹の弟會社ともいふべき松竹キチマ株式會社が設立以來一層岩見の意を迎ふる必要から急進的交渉を松竹側から持出し岩見からも亦始めて共同事業を以て應ずべきことを申出で双方交渉熟議を遂げた結果一株廿圓總株數三万株で六十万圓の株式會社とし會社は岩見所有に屬する函館小樽札幌旭川に現在する各錦座及同劇場附屬諸道具及興行權利を金五十万圓で買収し創立費其他流動資金十萬圓と定め合計金六十万圓の株の内半數を松竹岩見及東京創立賛成者で引受残り一万五千株を一般より公募し來年一月元旦から新事業開始する豫定で錦座株式會社は松竹合名會社大谷竹次郎、白井竹次郎、白井松次郎、白井信太郎及岩見永次郎はいふに及ばず

其他一流の興行者及本道好劇家の著名なる紳士紳商三十余名が發企人及賛成者で會社設立開場後は勿論本道興行界を風靡するであらう此一大改革決行後の小樽錦座は岩見傳次郎君營業主任で平素は松竹キチマの常設とし時機に依り諸興行を開場し錦座をして將來全道興行界の覇權を一手に掌握せしむる松竹岩見の方針で傳次郎君と鈴木友次郎君は此間に介在し他の興行關係者と互ひに協力の上今後斯界に活躍する大意氣込みだ。

中央座（稻穂町）本道に於て興行界と花柳界とに亘つて今日では牢乎として抜くことの出來ない一大勢力の所有者である同座主辻廣禎介君は旭川に於ける見番の鼻祖丸サ見番の司宰者で同見番は明治三十二年に元の第一樓主佐々木源吾翁が創立したのが抑もの嚆矢で創業當時の藝妓が三十六名に過ぎなかつた其後第一樓主たる君は今故人ととなつた其頃の旗亭望喜樓主三久保の經營して居た上川見番後の共同見番と多年頸敵視して來たが兩君の妥協が成立し遂には上川見番を擧げて丸サ見番に買却して終ひ其反對者で今だに頑迷を持續して居る大川屋の崎松清太郎が大正元年十二月單獨で今の共同見番を設立し一時勢力を

張つたけれ共同二年個人經營の非を悟つて組合見番に変更し資本を大にして一大發展を劃策し盛んに藝者を優待した結果丸サは優越權を占有し且共見は日に月に形勢が傾いて段々藝妓の數も減り悲況に沈緬して行くので同五年崎松も單獨經營を熄め株式會社組織に変更し同時に旭川見番と改稱して丸見と復讐戰を試みたが、今だに七八十名の藝妓を所有し業勢が薩張振はないが之に反し丸見は營業益々膨脹發展する一方で現在二百余の大小藝妓を包擁し旭川は勿論本道花柳界異數の實勢力を持續して居る君は丸見の外に本道屈指の旗亭第一樓及佐々木座の經營者だが土木建築請負業者中でも實に錚々たる人物で本道興行界の覇權を漸次掌握すべく昨年夏小樽中央座を前座主福井家事坂口虎次郎から買入るゝや直に劇場の大改築を行ふ同年の小樽演藝界で最も藝術味のある演藝の中に數へらるゝ故團十郎の養子市川新之助が新内語りで日本一の富士松加賀太夫等の出語りで女形の名人視せられた故尾上菊次郎の後繼者に擬せられた松本武五郎の此糸で東京で當り藝の櫻川蘭蝶を演じて其濃艶さ加減は見物を腦殺させなければならぬ程艶節をかけた錦繪風のお芝居を見せた

のみか『明鳥』と共に當代無比なる加賀太夫の新内は只もう聴衆を濃艶な境地へ引摺込み藝術力を其場合遺憾なく發揮し又當今舊劇界の最大權威者で堅實無比なる藝の持主市川中車は女形の名人故瀨川路之丞を早晚襲名する坂東秀調、世話物の名人故片市の伴片岡市藏當今舊劇界の大花形市川八百藏等大一座の座頭として辻廣披露興行に松王丸、安宅の辨慶光秀を演じたが何れも折紙附の當り役で斷じて他の追従を許さぬ舞臺藝術の權威を見せ今後始終さうした大物を上て藝術に對する民衆の饑渴を満すことに極力努むる君の興行方針は今や着々實現して行く本道興行界の趨勢である君が旭川の佐々木座を根據とし小樽の中央座興行の振分場として函館の巴座、札幌の西田座を純辻廣系統として斯界を縦斷し優に錦座の岩見君と其覇を争ひ得るだけの實勢力の支持者である事は社會公知の事實でありそれがまた近き將來には必らず二分野を劃さるゝ本道興行界の勢力地盤を確實に占有する所以である君の花柳、興行兩界に於ける絶大の手腕は現今の社會的地位を占むる上に於て何物も之に當ることは出來ない其上君の日頃仁侠の肌合と一度觸るれば何時までも滾々とし

て盡さない泉の如き至純なる温情は到底他の同業者に求むることは難い君は斯うした精神精力主義の權化であり興行界には得易からざる人物で確に本道花柳興行兩界の大なる誇りである。

演藝館 (花園町) 小樽に於て常に高級演藝を犠牲的に提供して居る同館はよく小樽の趣味に適へる進歩した興行振りて絶えず繁盛を極めて居る經營者は本道の興行師中元老であり且多年小樽花柳界に大勢力を持続した八木周藏氏の令息八木豊吉君て本道屈指の口物興行師である君は飽迄一匹一本の腕で同館を發展させたのである且若いにも似ず何から何まで氣の付く方て今迄上げた藝人は誰に限らず食物にまで細心の注意を拂て始終優遇して居るので一度同館に來た藝人等は何時までも君の名を忘れる事が出來ないといふ位で現に小樽興行組合常任幹事として同業者間に立られて居りまた大物を上る際は營利觀念を全然離れて民衆藝術提供の立場で客本位の興行するので評判がよい現に本年も現代落語界の第一人者である名人柳家小さん及當今女義界の權威者豊竹團司大一座を開演して眞個藝術の妙味

を聴衆に納得させた地方演藝界の誇りを示して居る。

電気館 五層樓頂上にはサーチライトを設備し輪奐の美を極むる稻穂町の同館は株式會社の活動寫眞常設館で社長は小樽區の重鎮寺田省歸氏其經營は末松力氏が専ら衝に當つて居る映寫は鮮明専門辯士も多い館内に中央俱樂部ありて貸席と撞球の設けあり姉妹館たる入舟町第二電気は坂口虎次郎、末松力氏等の經營て愛活家の受がよい。

神田館 (妙見町) 同館は本道興行界の重鎮現北海道聯合興行組合長佐藤市太郎氏(旭川)の經營て木谷ナツ子氏が一切を監督して常に優秀寫眞を提供し活動狂を喜ばして居る。

花柳界

共立檢番 (花園町) 從來の北斗見番重役三業組合幹部等のやり方が慊たらないので小樽藝妓友愛會長美代吉裙一派は今夏北斗見番を脱して新に藝妓は藝妓自身て立つて行かねば

不可ないと覺悟して設立したのが同檢番である弱い稼業の藝妓の汗の結晶を今迄の様に見番料理屋側の一部金權者に私されず實際に働いた當事者全體に均霑せしむるのが當然の道だと自己存立の主張を叫んで小樽花柳界の改造を計つた共檢派のやり方は新思潮に棹さした藝妓全體の業權擴張だ事實は何よりも雄辯て同檢設立さるゝや今迄壓迫的境遇に馳て來た北斗見番大小二百の藝妓は旗鼓の勢を以て走せ參じ今日ては堅城を擁して小樽花柳界に多年霸を稱へた北斗見番と其勢力を顛倒した觀がある殊に眞に藝妓としての實力も亦大に徑庭あるのは事實である況んや同檢代表者たる美代吉裙は小樽五百の藝妓中異例な人て十何年も婆さんて押通して來たのみか慈悲慈愛の相を帯びた端正の人て茶の湯生花の奥儀を授かり藝妓に似合はぬ民衆中心主義の思想家て共檢をして飽迄共立の實を擧げ小樽中心地の便利のよい處へ現在積立てある五万圓に尙五万圓積立後に藝妓技藝獎勵の演藝場を建て聊かなりとも小樽の文化に寄與して後半世の目的を達成しやうと精心誠意努めて居るに於てをやさうした誇りを持って居る共檢が設立さるゝまでに隠れた効績者があるのは勿論だが

中にも猪股氏の如きは共檢設立の最功勞者て斯界に重きをなして居る。

開陽亭 (山ノ上町) 札幌のいく代と共に本道旗亭界の双壁である同店女將は宮松幸子て父は宮松茂左衛門といふて其全盛時代は東京でも名を知られた一廉の商人て母は若い時、美州家の祐筆を勤めた女なので嚴かな家庭教育の裡に人となつたが女將が跡見女學校を卒業した十九歳の頃、父は相場の失敗から明治二十一年函館に渡り未廣町は丸モといふ壽し屋を開業した女將は女學校の才媛といはれてゐたが卒業後歸函し六和女學校に教鞭を執つたが親が旗亭經營のため心苦しく教職に在る事一年で斷然身を退きそれから父の業を扶くる事となり手馴れぬ業も若い女將の忠實振りに追々繁昌して來た頃、彼女は會社員であつた良夫を養子に迎へ聲は先代を襲名して宮松茂左衛門を名乗り料理屋業も順調に進んで今一呼吸といふ所て夫は漸く女將の心を離れ茶屋酒に親しみ女將が貞節を盡せば盡す程、天魔につかれ夫の亂倫に果は債鬼に襲はれて遣されず今から十八年前、常夏の或る夕、僅か一個の行李を身に携へて單身小樽に志して來たが資本金とてピタ一文もなく流石女將も途

方に暮れたが豫て女將の健氣なる振舞に同情した親戚の鈴木市次郎氏は今の開陽亭の先の經營者が廢業して空店になつて居るのを世話して開店させた鈴木氏の俠氣に感激した女將はそれから殆ど死物狂ひになつて働いた結果漸くよくなりかけた頃函館の店はつぶれ夫は澤山の子供を連れて小樽へやつて來た其時も女將は夫に對し貞節に仕へたが夫の放蕩は止まずに悲風慘雨の生活を續けた女將は遂に暴逆の夫に打ち勝ち今日では世間の荒波と闘つて來た夢の如き昔の運命から全く脱がれ開陽亭基礎をして盤石ならしめ榮華の權化と云はれて居る過去十七年間にこれ程築き上げた男も及ばぬ女將の手腕は勿論非凡でありまたさうした強い心の持主が小樽花柳界を將に風靡せんとする共立檢番側の一大勢力者であることは本道斯界の大なる誇りである開陽亭には『踊の豆太』おてる、小常、雪松、琴松、五郎小花、ぼんた、をきな、文子(本玉)小つる、鈴奴、あき子、雪子、千代子、若丸、市太郎(半玉)等皆撰抜きの藝妓揃ひで繁榮を極めて居る。

美合 (妙見町) 明治三十七年千登登の創立した末廣分見番は最初少資本で個人經營で藝

妓も三十人位しか居なかつたが其後株式會社北斗見番と改稱組織が全然變更さるゝや分見
だけで藝妓が百十名となり線香の賣れ高も常に他見番を凌駕する様になつたのは見番の營
業制度を夙に改善して所屬藝妓の收入増率本位としたからである、紙合君等が末廣見番て
腕を揮ふてからは所謂北斗見番側は小樽花柳界に於ける絶對勢力を一時壟斷したのである
君は大正七年六月擧られて同見番取締役となり昨冬旗亭を開業し今では秀奴靜枝其他の綺
麗首を常抱へにして千客萬來の有様だが花柳界の大紛擾か惹起するや常に藝妓擁護者を以
て自他共に許す君は大に感ずる所あり北斗見番及料理屋組合役員を一切辭任し現に新設の
共檢側へ籍を轉じ尙依然として斯界に重きをなして居る店主は紙合理三氏。

三葉 (料理屋) 花園町區役所通りに粹な料理屋を開業して居る三葉の女將は本名瀬戸ち
よのさんて身元を聞けば以前は相當の家庭に人となつた素人衆て花羞かしい娘時代は智八
人の誇りがましい境遇に立つたもので其時分には今の様な水商賣をしやうとは夢にも思は
なかつたが奇しきは人の運命て廻り合はせた今の料理屋もフトした動機て始めたものだが



開業以來追手搦手一切萬事女將が采配打ち
振り／＼座敷の設備、板前の吟味は勿論客
扱ひは全て搔い所に手が届き客を外らさぬ

世辭愛嬌は小樽旗
亭界の花といはれ
る所から毎日千客
萬來の忙しさを流
石の女將も眼を廻

す程の大繁昌だ今年三十歳て油の乗つた最
中浮氣の虫は堅く封じて居るけれどもまだ
何處やら色香失せない姥櫻て何事もお客本
位の斡旋振は旨いものだと花柳界の大評判

松島屋 花園 東一丁目て店主は阿部嘉
藏氏うなぎ料理が唯一の自慢て毎夜醉客出
入して大繁昌

やぶ善 妙見川筋て營業して居る同店は
すき焼きそばを専門とし店主熊谷善藏氏が
采配を振りつゝ營業してゐるので毎日繁昌し
て居る。



まり子(小樽見番) 元稻穂見番の半玉が振出で中央見番に箱替其後樽見の設立さるや姉さんのらく子と共に氣勢を添た賣れッ妓で今年十七歳巳の五黄土性であるから俠氣があつて立身する星だが運の來るのを待べし本名櫻庭ヨシエ新春駒の秘藏娘で縹緞のいゝのと人好きのする一流藝妓で座敷が持てる。

有爲會 小樽旗亭界に於て絶対に抜くことの出來ない最大勢力を有する同業團體である同會は區内の代表的料理屋を網羅して居り顔觸は阪内亭、梅林、若葉、開陽亭、大政、嬉し野、山内品次、會津屋、あけぼの、さゞ波、菊水、甲江子、一二三樓で今日では全部目下日の出の勢へある共檢側の料理屋で小樽花柳界に於て宛然王國をなして居り藝妓擁護とお客本位で押通すべく團結したので評判がよい。

小樽遊廓 今の遊廓は明治十一年金曇町今の信香方面に遊廓開け十四年の大火に住の江町へ移轉し其後明治廿九年住の江町から發火附近大火となつて移轉説起つて同三十三年六月後天狗山へ移轉したのだ遊廓は羽衣町、辨天町、仲の町、京町に分れ現在貸座敷十八軒で毎夜色揃ひして居る所謂歌舞の菩薩は百余名二業取締は石田太吉(八幡樓)中村京一旭樓で住の江町時代から營業して居る鯉川樓と清明樓は廓内での古暖簾中での一番遊廓功勞者は鯉川樓の八木周造夫妻。

鯉川樓 (南廓) 小樽花柳界の重鎮であり色内見番時代から多年堅城を擁して今の北斗見番の絶対勢力者であつた同樓主八木周造夫妻が住の江町へ來て開業したのは明治二十三年で大火後南廓へ移轉し現今の如き全盛を極めて居る。

旭樓 (南廓) 明治四十年の開業で樓主中村京一氏は現に二業組合副取締の榮職に在り同業者に重きをなしてゐる趣味は大弓店は別嬪揃ひ。

大正十年十二月三十日印刷
大正十一年一月五日發行

【定價金六拾錢】

著作人兼
發行人

小樽區綠町三丁目八番地
大槻忠太郎

印刷所

小樽區花園町東三丁目
小樽印刷株式會社

終

